

# 中野恵祥 板金に生命をふきこんで

2015年6月24日(水) — 9月13日(日) 会場：常設展示室

※月曜休館 ただし7月20日(月)は開館、7月21日(火)は休館します。

※切り紙ギャラリー・トーク 7月17日(金)、8月21日(金) 午後2時より



6.《牛》1957年

中野恵祥<sup>けいしょう</sup>は、1899（明治32）年に東京に生まれた。本名は梅村三郎といい、幼くして中野家の養子となり、12歳となる年から、金工家・白崎白善<sup>はくぜん</sup>（亀次郎）に弟子入りし、厳しい修行に励んだ。白善のもとには、東京美術学校を卒業した気鋭の鑄金作家・香取秀真<sup>ほつま</sup>などがたびたび訪れた。恵祥は、秀真との出会いによって、奥深い金工の芸術の世界を知り、やがて1927（昭和2）年に帝国美術院の展覧会、いわゆる帝展に工芸部が創設されると、これに初入選し、その後生涯を通じて文展、日展などの公募展に出品し続け、新たな挑戦を重ねていくことになる。個性を發揮できる創作の場において、恵祥が生みだしたのは、自らの緻密な金工技術を誇示するような作品ではなく、《牛》(No.6)にみられるような板金とよばれる金属板で極めてシンプルに形づくった動植物や昆虫などのユニークな造形だった。

ふくやま美術館には2011（平成23）年、恵祥の長男であった故中野政樹名誉館長の夫人の昌子氏により、9点の作品が寄贈された。特集展示ではこれらをすべて出品し、時代を先取りするような、恵祥の現代的な造形感覚をふりかえるとともに、館蔵品から動物をテーマとした絵画、彫刻なども展示する。



《銅端鳥文水瓶・盤》1927年 東京藝術大学蔵(参考図版)



1.《花飾》1935年頃



2.《迦楼羅水瓶》1952年

## 白崎白善に師事、香取秀真との出会い

中野恵祥の最初の師、白崎白善(1858-1925)は、伝統的に鋳物業が盛んな富山県高岡市の出身で、その弟子への教育は大変に厳しいものであったという。しかし恵祥は修行に耐え、師のもとで、金属を加熱して溶かし、鋳型に流し込んで固め、研磨などして仕上げる「鋳金」、<sup>たがね</sup>鑿で金属を彫ったり打ったりして装飾を施す「彫金」、<sup>ちようきん</sup>金属を鍛え延ばして立体を成形する「鍛金」などの多くのテクニックを、着実に身につけていった。

当時、白善は東京の日暮里に住んでおり、ほど近い上野の東京美術学校(現・東京藝術大学)で教鞭をとっていた香取秀真(1874-1954)が、よく仕事の依頼に来ていた。同校を卒業していた秀真は、1900(明治33)年、パリの万国博覧会に作品を出品し、銀賞牌を受けたこともある鋳金作家であり、金工史の専門家、歌人でもあるなど、多彩な才能をあわせ持つ人物だった。恵祥は、第一の師である白善とともに秀真の作品の仕上げなどを手伝いながら、秀真からも多くを学んでいった。

## 関東大震災と大阪行き

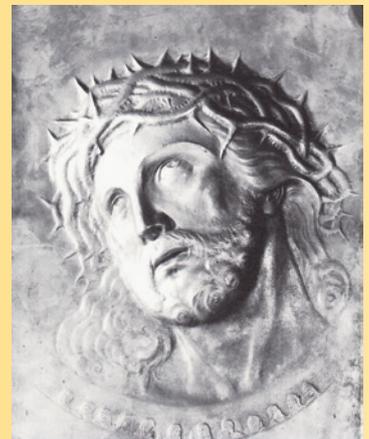
師・白善の仕事を受け継ぎ、彫金家としての活動を開始していた恵祥を襲ったのは、1923(大正12)年の関東大震災だった。恵祥は震災のなかで、両親も、家も失い、大阪造幣局彫刻所長だった飯田勝美を頼って東京を離れ、約2年間を大阪で暮らすことになった。だがこの時期に飯田のもとでは、「鉄型彫刻」という特殊な彫金技法を習得することができた。この技術は、その後、彼の生計を支える重要な仕事のひとつとなっていく。

### 鉄型彫刻とは

鉄型彫刻とは、鉄材に、鏡のように左右を逆に浮き彫り模様を彫る特殊な技法です。同じ模様のメダルなどを、プレス加工で大量生産するための金型制作に使われました。大阪造幣局では、貨幣製作のために、精巧な鉄型彫刻の技術が必要とされていたのです。

大阪時代に、高度な鉄型彫刻の技術を習得した恵祥のもとには、のちには皇室での祝賀行事の際に配られる、銀製の小箱「ボンボニエール」や、記念メダルのための鉄型彫刻の制作依頼がたびたび舞い込んだといいます。

この頃、彼が大阪市美術協会展に出展し、時事賞を受賞した「キリスト打出像」は、正規に西洋美術を学んだことはなくても、写真などを見るだけで、たちまちに鉄型原形にその画像を彫りあげてしまったと伝えられる恵祥の腕を彷彿させます。



《キリスト打出像》1924年(参考図版)

## 帝展、新文展への挑戦

東京に戻った恵祥は、展覧会向けの作品制作にも力を注ぐようになる。とくに1927（昭和2）年の第8回帝展は、工芸部が創設され、工芸が公募展のなかで、「芸術」として評価されるようになった画期的な年だった。同じころ結婚し、一家の大黒柱となり日暮里に居を構えた恵祥は、この帝展に、自らの培ってきた鑄金や彫金、鍛金などの技術を駆使した《鑄銅端鳥文水瓶・盤》（参考図版）を初出品した。恵祥が私淑した、古典的な鑄金作品を得意としていた香取秀真の影響を感じさせる端正な造形の作品は、見事に初入選を果たす。ところが、翌年の第9回帝展に出品した作品は落選。このことをきっかけに、恵祥は鑄金ではなく、板金を使った新しい制作に挑戦していくことになる。

## 板金での制作

恵祥が新たにとりくんだ板金工芸は、工業資材にも使われるような薄い金属の板を折り曲げたり、組み合わせて造形をおこなうものだった。初期作品の《花飾》（No.1）では、円や直線などの、板金の特性である幾何学的な形状を残しつつ、花や葉の形をつくりだそうとする斬新な試みがされていることがわかる。その新奇性が評価されたのか、恵祥はこれら板金工芸により、帝展や新文展でも、入選を重ねていく。

やがて日本は、第二次世界大戦に突入し、金属は配給制となり、金工家たちが制作材料を入手できない、不遇の時代となった。恵祥は、航空機エンジンの鑄造研究に携わったり、疎開先で畑仕事をするなどして糊口をしのぎ、仕事道具の大半を失う状態で終戦を迎える。

戦後、食糧すら満足にない暮らしのなかで、ようやく恵祥が入手できたのも、軍需工場で使われていた真鍮板、つまりは板金だった。恵祥はこの素材をえて、再び制作に打ち込んだ。戦後にはじまった日展では、1946（昭和21）年の第2回展を皮切りに入選を重ね、1951（昭和26）年には審査員をつとめ、囑託出品となった1952（昭和27）年の第8回展には仏教の八部衆のひとりの迦楼羅を、曲線で構成される優美な人物像としてあらわした《迦楼羅天水瓶》（No.2）を出展している。

こうしたなかで、恵祥は次第に、板金への加工を、可能なかぎりそぎ落とし、造形を単純化しようとするようになる。たとえば、《休む蛙》（No.4）や、《かまきり》（No.5）を見ると、ほぼ一枚の真鍮板を切り抜いて、折り曲げ、必要に応じて別の板を少しつなぎ合わせるだけで、小さな生き物たちの姿をつくりだしていることがわかる。切り詰められた板金のシャープな線は、まるで墨絵のみで鳥獣の躍動感を描きだした絵巻のような緊張感を生み出し、古画のような素朴さを残しつつ、シンプルでモダンでもある、美しい姿を形づくっている。

どうした心境の変化があったものか、彼の雅号は、これまではずっと本名の三郎を一部変えて、「三朗」を名乗っていたものを、この頃から「恵祥」を名乗るようになる。そして1957（昭和32）年には当時の金工作家としては珍しく、銀座の村松画廊で個展「中野恵祥板金新作展」を開催するが、伝統的な金工の世界のなかではその板金工芸は先端的すぎるととらえられたのか、独創性は高く評価されたものの作品は1点も売れなかったという。



4.《休む蛙》1957年



鳥獣人物戯画 甲巻 部分図 12世紀（参考図版）



5.《かまきり》1957年



8.《飾牛》1962年



7.《牛頭花挿》1958年



9.《牛飾籠》1969年



3.《螳螂鈕籠》1957年

恵祥の板金作品の特徴のひとつに、何度も同じモチーフのヴァリエーションをつくることあげられる。例えば、ふくやま美術館のコレクションのなかだけを見ても、「牛」という主題には、表現方法を変えながら4回も挑んでいる。それは、この動物を表すのに、最も的確で洗練された形を、作家が探り続けた努力の軌跡なのかもしれない。

こうした作品を、恵祥は強いて売り物にしようとは考えていなかったようだ。彼は生活のためには、注文主の要望に応え、精密な鉄型彫刻や、古典的な彫金や鍍金の仕事をこなしていた。他方、自分の制作の場においては、新しい素材である板金をもちいて、日常生活のなかで出会う身近な動植物を題材にして、ときに極限までかたちの単純化をおし進めつつ、ユニークで愛らしい姿として生みだしていったのだ。明治から昭和までの時代を、飄々としてしなやかに生きぬいた卓越した職人であり、同時に自由なアーティストだった金工作家の姿を、そこに見ることであろう。

(学芸員 平泉千枝)

参考文献：『中野恵祥－鍍金の造形－展』渋谷区立松濤美術館 1992年、『香取秀真展』佐倉市美術館 2003年

#### 編集後記

金工作家・中野恵祥の展覧会は、1992年に渋谷区立松濤美術館で開催され、その全貌が知られるようになりました。ご子息であった当館の故中野政樹名誉館長は、松濤美術館や東京芸術大学美術館にも寄贈をしましたが、恵祥作品の整理をすすめ、箱などを眺めはじめたのは、亡くなられる2010年6月の数年前からでした。その後、それらは中野昌子夫人の手により当館に寄贈されることになったのです。今回の所蔵品展では、それら9点の作品を中心として、特徴的なテーマである動物や昆虫に合わせて他の作品も選び、夏休み向けに特集を組んでみました。子どもたちにも喜んでもらえる内容になっていると思います。

(学芸課長 谷藤史彦)

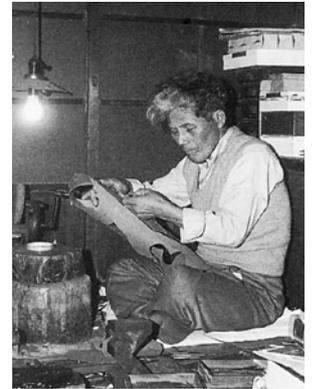
# 第1室 特集展示：中野恵祥 板金に生命をふきこんで

## 中野恵祥 略年譜

- 1899 (明治32) 年 6月28日、東京、京橋の梅村家の三男として生まれる。本名三郎。中野政勝の養子となる。
- 1911 (明治44) 年 12歳 金工家の白崎白善(亀次郎)に弟子入りする。
- 1923 (大正12) 年 24歳 東京・日暮里と横浜で金工家として活動していたが、関東大震災で両親と家を失う。大阪に移り、大阪造幣局彫刻所長の飯田勝美に師事する。
- 1925 (大正14) 年 26歳 大阪市美術協会展に《キリスト打出像》を出展し、時事賞を受賞。東京に戻り、東京高等工芸学校金属科に一時勤務する。
- 1927 (昭和2) 年 28歳 田村ろくどと結婚し、日暮里に暮らす。第8回帝展で《鑄銅端鳥文水瓶・盤》が初入選。
- 1929 (昭和4) 年 30歳 長男・政樹誕生。第10回帝展に《十二支置時計》が入選。
- 1932 (昭和7) 年 33歳 次男・建夫誕生。
- 1935 (昭和10) 年 36歳 妻ろくを亡くす。翌年、森川ふさと再婚。改組第1回帝展に《鳥香炉》が入選。
- 1937 (昭和12) 年 38歳 第1回新文展で《獅子香炉》が入選、第5回以降は無鑑査となる。
- 1943 (昭和18) 年 44歳 古河工業の鑄造研究所で航空機エンジンの鑄造研究の原型などをつくる。
- 1944 (昭和19) 年 45歳 茨城県に一時疎開。同地で終戦をむかえる。
- 1946 (昭和21) 年 47歳 第2回日展に《牡丹透獅子香炉》が入選。
- 1952 (昭和27) 年 53歳 第8回日展に《迦楼羅天水瓶》(No.2)を出品、この年以降、委嘱出品。
- 1957 (昭和32) 年 58歳 第13回日展に《螭螂鈕筥》(No.3)を出品。3月、東京、銀座の村松画廊で個展開催。
- 1958 (昭和33) 年 59歳 第1回新日展に《牛頭花挿》(No.7)を出品。
- 1962 (昭和37) 年 63歳 第5回新日展に《飾牛》(No.8)を出品。
- 1969 (昭和44) 年 70歳 第1回改組日展に《牛飾筥》(No.9)を出品。
- 1974 (昭和49) 年 75歳 12月30日喉頭がんで没する。



1929 (昭和4) 年



1966 (昭和41) 年

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	寸法 (cm)
1	中野恵祥	(1899-1974)	花飾	1935頃	真鍮, 板金造り, 鍍金	8.2 × 15.8 × 11.2
2	中野恵祥		迦楼羅天水瓶	1952	真鍮, 板金造り, 鍍金	30.5 × 12.5 × 6.2
3	中野恵祥		螭螂鈕筥	1957	真鍮, 板金造り, 鍍金	33.0 × 25.7 × 6.2
4	中野恵祥		休む蛙	1957	真鍮, 板金造り, 鍍金	7.2 × 12.0 × 7.2
5	中野恵祥		かまきり	1957	真鍮, 板金造り, 鍍金	11.0 × 11.6 × 3.0
6	中野恵祥		牛	1957	真鍮, 板金造り, 鍍金	10.0 × 20.0 × 4.5
7	中野恵祥		牛頭花挿	1958	真鍮, 板金造り, 鍍金	31.5 × 33.5 × 11.3
8	中野恵祥		飾牛	1962	真鍮, 板金造り, 鍍金	29.0 × 56.8 × 11.0
9	中野恵祥		牛飾筥	1969	真鍮, 板金造り, 鍍金	26.0 × 41.0 × 7.8
10	棟方志功	(1903-1975)	躑躅弥陀の柵	1973	木版, 裏彩色, 紙	51.8 × 35.7
11	松本竣介	(1912-1948)	牛の話、人物	1945	紙, 鉛筆, インク	26.8 × 36.2
12	熊谷守一	(1880-1977)	蛙	不詳	紙本着色	31.0 × 42.0
13	佐々田憲一郎	(1899-1995)	めようと馬	1965/1992	油彩, カンヴァス	37.9 × 45.5
14	エドワード・マイブリッジ	(1830-1904)	動物の運動 #630	1887頃	コロタイプ	13.7 × 45.0
15	香月泰男	(1911-1974)	やぎと人物	不詳	紙本墨画, 鉛筆	19.2 × 13.6
16	ジュゼッペ・パリッツィ	(1812-1888)	羊飼いと羊の群れの風景	1870頃	油彩, カンヴァス	49.0 × 72.0
17	徳永善彦	(1933-)	大と小	1958	ゼラチンシルバープリント	52.5 × 34.5
18	大島祥丘	(1907-1996)	月下遊敖	1947頃	紙本着色	145.0 × 146.0
19	児玉希望	(1898-1971)	暮春	1932	絹本着色	161.0 × 164.6
20	猪原大華	(1897-1980)	若桐	1927	絹本着色	209.0 × 190.0
21	片山牧羊	(1900-1937)	野狐図		絹本着色	146.0 × 50.3
22	大村廣陽	(1891-1983)	猫に芥子		絹本着色	130.3 × 41.7
23	吉原英雄	(1931-2007)	ガラスの向う側(版画集「ペットショップ」)	1979	メゾチント・エッチング, 紙	39.2 × 17.5
24	吉原英雄		ソファの上(版画集「ペットショップ」)	1979	メゾチント・エッチング, 紙	29.0 × 35.5
25	吉原英雄		プチペット(版画集「ペットショップ」)	1979	メゾチント・エッチング, 紙	35.7 × 29.0
26	吉原英雄		蟻の観察(版画集「ペットショップ」)	1979	メゾチント・エッチング, 紙	22.1 × 35.8
27	吉原英雄		三匹の羊(版画集「ペットショップ」)	1979	リトグラフ, 紙	46.4 × 38.0
28	ベルナルド・ビュッフェ	(1928-1999)	ビートル	不詳	リトグラフ, 紙	76.0 × 56.0
29	中山一郎	(1912-1995)	鴉	1961	油彩, カンヴァス	100.0 × 72.7
30	脇田和	(1908-2005)	鳥の伝言	1986	油彩, カンヴァス	72.0 × 58.0
31	柳原義達	(1910-2004)	鳩	1981	ブロンズ	34.0 × 41.0 × 23.4
32	草間彌生	(1929-)	私の犬のリンリン	2009	ポリウレタン樹脂	20.0 × 27.0 × 11.0
33	アルトゥーロ・マルティーニ	(1889-1947)	牛	1943/89	ブロンズ	28.5 × 34.0 × 13.0
[参考作品]						
	香取秀真	(1874-1954)	金印(模造)		金銅製, 金箔	2.2 × 2.3 × 2.3
	香取秀真		短冊(中野恵祥旧蔵)		紙本墨書	36.0 × 2.0

## 第2室：日本の近現代美術

\*は寄託作品

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	寸法 (cm)
34	高橋秀	(1930-)	ブルーボール#101	1971	油彩, カンヴァス	142.0 × 190.0
35	鬚嘸	(1931-)	Violin on the chair	1967	油彩, 木	75.0 × 45.0 × 50.0
36	山口長男	(1902-1983)	壘形	1959	油彩, 合板	183.0 × 274.0
37	岸田劉生	(1891-1929)	橋	1909	油彩, カンヴァス	33.6 × 45.7
38	岸田劉生		静物(赤き林檎二個とビンと茶碗と湯呑)	1917	油彩, カンヴァス	33.7 × 45.8
39	岸田劉生		新富座幕合之写生	1923	油彩, カンヴァス	31.9 × 41.0
40	岸田劉生		麗子十六歳之像	1929	油彩, カンヴァス	47.2 × 24.8
41	吉田卓	(1897-1929)	子供のゐる風景	1922頃	油彩, カンヴァス	45.5 × 38.0
42	南薫造	(1883-1950)	童子		油彩, カンヴァス	79.5 × 130.0
43	小林徳三郎	(1884-1949)	花と少年	1931	油彩, カンヴァス	53.1 × 65.0
44	梅原龍三郎	(1888-1986)	百合	1973	油彩, カンヴァス, 板	45.7 × 38.0
45	安井曾太郎	(1888-1955)	手袋	1943-44	油彩, カンヴァス	89.3 × 72.8
46	林武	(1896-1975)	妻の像	1927	油彩, カンヴァス	90.9 × 72.7
47	小磯良平	(1903-1988)	婦人像	1969	油彩, カンヴァス	52.0 × 44.0
48	熊谷守一		女の顔	1931	油彩, 板	41.0 × 32.0
49	藤井松林	(1824-1894)	百花百鳥之図	1889	絹本着彩	121.2 × 54.0
50	富岡鉄斎	(1836-1924)	児童歓喜之図	1922	紙本墨画淡彩	133.0 × 32.6
51	福田恵一	(1895-1956)	安養	1926	絹本着色	236.0 × 434.5
52	高松次郎	(1936-1998)	形 (No.1201)	1987	油彩, カンヴァス	218.0 × 182.0
53	松本陽子	(1936-)	ペイルシエバの荒野	1990	アクリル, カンヴァス	200.0 × 250.0
54	野田弘志	(1936-)	ガラスと骨II	1990	油彩, アクリル下地, カンヴァス	146.0 × 112.0
55	中川直人	(1944-)	アフリカの女王	1982	アクリル, カンヴァス	150.0 × 178.0
56	堀内正和	(1911-2001)	線C	1954	鉄, セメント	45.0 × 78.0 × 46.0
57	土谷武	(1926-2004)	植物空間VI	1990	鉄	64.0 × 57.5 × 41.5
58	平瀬田中	(1872-1979)	寿星	1962	木, 彩色	47.0 × 41.0 × 28.0
59	北大路魯山人	(1883-1959)	金銀彩武蔵野鉢	1925-34	陶	15.2 × 27.5 × 27.5
60	金重陶陽	(1896-1967)	一重切花入	1964	陶	20.0 × 13.0 × 11.0

## 第3室：ヨーロッパ美術

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	寸法 (cm)
61	レオン=オーギュスタン=レルミット	(1844-1925)	昼食の支度		パステル, 紙	33.5 × 41.5
62	ウジェーヌ=カリエール	(1849-1906)	腕組みの座る女		油彩, カンヴァス	46.0 × 38.0
63	フィリップ=パリッツィ	(1818-1899)	ザンポーニャ奏者	1862	油彩, カンヴァス	70.0 × 60.0
64	ジョヴァンニ=セガンティーニ	(1858-1899)	婦人像	1883-84	油彩, カンヴァス	120.0 × 87.0
65	ジャコモ=バッラ	(1871-1958)	輪を持つ女の子	1915	油彩, カンヴァス	51.0 × 60.5
66	アンドレ=ドララン	(1880-1954)	婦人像	1925	油彩, カンヴァス	61.0 × 73.8
67	パブロ=ピカソ	(1881-1973)	近衛騎兵 (17,18世紀の近衛騎兵)	1968	油彩, パネル	81.0 × 60.0 *
68	パブロ=ピカソ		りんごとグラス、タバコの包み	1924	油彩, カンヴァス	16.0 × 22.0
69	ウンベルト=ボッチォーニ	(1882-1916)	カフェの男の習作	1914	油彩, カンヴァス	58.0 × 46.0
70	モーリス=ユトリロ	(1883-1955)	酪農場	1916	油彩, 板	51.0 × 65.0
71	ソーニャ=ドロネー	(1885-1979)	色彩のリズム	1953	油彩, カンヴァス	100.0 × 220.0
72	クルト=シュヴァイツァース	(1887-1948)	抽象19 (ヴェールを脱ぐ)	1918	油彩, 厚紙	69.5 × 49.8
73	メダルド=ロッシ	(1858-1928)	門番の女性	1883	ワックス, 石膏	37.0 × 30.0 × 17.0
74	ジョルジュ=ルオー	(1871-1958)	ユビュ王	1939頃	油彩, カンヴァス	45.5 × 68.5
75	ハンス=リヒター	(1888-1976)	ベルナスコーニ氏像	1917	油彩, カンヴァス	60.0 × 47.0
76	ジョルジュ=デ=キリコ	(1888-1978)	広場での二人の哲学者の遭遇	1972	油彩, カンヴァス	80.0 × 60.0
77	サンドロ=キア	(1946-)	少女	1981	油彩, パステル, 紙, カンヴァス	194.0 × 150.0
78	ピエロ=マンゾーニ	(1888-1978)	アクローム	1961	小石, カンヴァス	70.0 × 50.0
79	ルチオ=フォンタナ	(1899-1968)	空間概念-銀のヴェネツィア	1961	油彩, ガラス, カンヴァス	60.0 × 50.0
80	ペリクレ=ファッツィーニ	(1913-1987)	風 (踊り子)	1956-60	ブロンズ	139.0 × 80.0 × 90.0

## 和室：松本コレクション「竹の誘い」

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	寸法 (cm)
81	清巖宗清	(1588-1661)	風竹一行	江戸時代	紙本墨書	102.5 × 27.5
82	啜啄斎	(1744-1808)	無輪二重切竹花入 銘 佐保姫	江戸時代	竹	(高)30.9×(口径)10.7
83	作者不詳		備前緋襷割蓋茶入	江戸時代	陶	(高)4.3×(口径)9.2×(胴径)9.2
84	作者不詳		刷毛目茶碗	朝鮮王朝時代	陶	(高)8.0×(口径)14.0×(高台径)5.3
85	古満雄哲	(1770-1855)	竹形蒔絵硯箱	不詳	竹	(高)4.8×(長)27.0×(幅)6.5